

二〇一九年一月二五日

早梅の忌明けの朝に匂ひけり  
風邪の吾に夫の手作りおじやかな  
訪へば灰と梅が香尼の寺  
古びたる扁額ゆかし冬座敷

素 秀  
明日香  
よう子

菜 々

二〇一九年一月二四日

大吉を句帳にしをる初みくじ  
鰯かまをせせりては杯重ねけり  
着膨れてリュックの紐に縛らるる  
寒晴や禅苑砂紋みだれなし  
しぐるるや石庭砂紋ゆるぎなく  
缶蹴りの鬼で終わりし寒夕焼

そうけい

やよい

うつぎ

菜 々

はく子

なつき

二〇一九年一月二三日

山荘へ一筋道や冬木立  
寒柝と和す子等の声街巡る  
石畳ゆるゆる歩み京四温

愛 正

たか子

菜 々

二〇一九年一月二二日

日当たれば消えいりさうや冬桜  
鰯起し闇に轟く旅枕  
シヨウウインドウ見て着膨れの背を伸ばす  
小春日のテラスに母の髪染める  
冬風すまसान空に鳶放ち

はく子

宏 虎

満 天

智恵子

やよい

二〇一九年一月二二日

急ぎ足寒夜の路地に音響く

満 天

二〇一九年一月二〇日  
白雲を脱ぎて雪嶺現れにけり  
雨晴れてより春宵の街あかり  
着膨れてボロ市覗き巡りけり  
海上に模糊と島影寒満月

たかを  
せいじ  
なつき  
三 刀

二〇一九年一月一九日

庭手入れ四温の日ざし摘むごとく  
身の籠のゆるむごとくに初笑  
ここだけの話に倦みし新年会  
受験子の横ではばかり咳一つ

菜 々

宏 虎

もとこ

なつき

毎日句会みのる選・二〇一九年一月二七日